第463号 昭和59年 1月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1984年（昭和59年）
1月号（No. 463）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

昭和58年度年次晩餐会 ……（1）
創立80周年に向けて ……（2）
クル渓谷からの帰路 ……（4）
ある正月の山 ……（4）
ヒマラヤ迎春てんまつ記 ……（5）
ラダック報告（4）……（6）
カナダ山岳会元会長夫妻を迎えて …（7）
ライルホルト・メスナーに
　下された判決 ……（8）
海外の山 ……（9）
山の本 ……（10）
　ガネッシュ・ヒマールV　中高年向
　きの山100コース　アルプス青春記
　写真集・みちのくの山
　コンプトン画集
東・西・南・北 ……（12）
　那須秋山山行　折井健一さんの追悼
　山行　池ノ平温泉の達ちゃんを励ま
　す会　高尾山懇親山行　北海道支部
　忘年会
お知らせ ……（14）

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜　10時～20時
水・金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

昭和58年度年次晩餐会

新名誉会員に村井米子氏

今年度の年次晩餐会は昨年と同じ、ホテルニューオータニで、十二月三日土曜日、午後六時より行なわれた。開会に先だち例年どおり簡易バーが開かれ、ここで充分グラスを傾け、機嫌よく席に着いた会員も二、三見受けられた。

晩餐会は先ず田口副会長の挨拶があった後、定刻を十分ほど過ぎて始まった。司会は神崎忠男総務担当理事。

今年も昨年に次ぐ三百名を越す参加者で大きなローズの間もいく分窮屈な感じさえした。三三七名の出席予定と発表されたが、届け出ずに加わった者もあったようで、会員総数三七九八名のほぼ一割が出席したようにも思えた。

開会の辞に次ぐ佐々会長の開会の挨拶では、多勢の参会者、北海道から九州まで、さらにインドから見えたIMF（インド登山財団）のコリー氏への感謝と、物故会員への追悼の言葉があり、さらに今年度の名誉会員となった村井米子会員の紹介、今年行なったアンケート調査による本会へ寄せる会員の関心度の高さ、それに関連し三十歳以下の会員の少ないことに対する問題、二年先の創立八十周年行事のこと、現在の日本山岳会の状況など総括的な話があった。

続いて物故会員の冥福を祈り、全員起立して黙祷。この間約三十秒、照明が暗くなる。

本年度の名誉会員には村井米子会員、永年会員には浅原重継、奥貞雄、永井俊三、関根吉郎、鈴木正俊の五会員が選ばれ、佐々会長より名誉会員章、永年会員章をそれぞれ拍手を浴びながら受け取った。

新しく名誉会員となった村井米子会員は、自分の会員番号三〇〇一番に触れ、アルパインクラブにならって女子会員を入れなかった日本山岳会が、戦後初めて女子の入会を認めたのを機に、これを戦前と区別するため三〇〇一番と区切りのよい番号をもらったのだと述べた後、昔登った山々の自然を残すため、これからは自然保護に力を尽くしたいと抱負を語った。

また永年会員を代表して関根吉郎会員は、中学生のころ入会した日本山岳会が一部でブルジョア山岳会と思われていたこと、戦後日本体育協会に加入してからの日本山岳会が支部の組織化、復員してきた大学山岳部員たちの国体に関連した活動などで、戦後登山界の方向を決める大きな役割を果たしたことなど、在籍五十年間に見た日本山岳会の姿の断片を語った。

この後インド・エベレスト登山隊隊長だったコリー氏が吉田宏会員より紹介され、IMF創立二十五周年に関する記念品と、氏の著書三冊の贈呈が佐々会長にあり、乾盃となった。

乾盃の音頭は元会長今西錦司会員がとり、「本席の年次晩餐会をお祝いし、あわせてご来場の皆様方のご健康をお祈りして乾盃いたしたいと思います」の前置きで高らかに「乾盃」となる。

こうしてしばらく＜冷菜盛合せ＞だの＜卵白入りふかひれスープ＞など、次々とテーブルに運ばれる料理を口にしながら、各テーブルではテーブルマスターを中心として、自己紹介や歓談が続く。これがひと通り済むと、それぞれの会員は他のテーブルに散らばる友人、知人を求めて移動し、会場全体はしばらくにぎやかな話し声、グラスの触れる音などに包まれた。

メニューの後半の＜生栗と鶏肉の煮込み＞が出るころ、ブータンへ行ってきた田部井淳子、今年もエベレストへ行った小西政継、59年カンチへ行く鹿野勝彦、二方向からK2へ行った新貝勲と、各遠征隊の隊長をつとめた、またはつとめる会員の紹介が続き、北海道支部から熊本支部までの各支部会員や、今年度の新入会員の紹介が、歓声の混じる中、行なわれるころには、どのグラスも皿もおおかた空となる。

会をしめくくる閉会の辞は、これに「下山の技術をもっと研究するように」という要望を付け加えて山田二郎副会長が行ない、最後は吉沢一郎名誉会員の音頭による「萬歳」三唱で、昭和五十八年度年次晩餐会は無事盛会裡に終了した。

（岡沢　祐吉）

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

お知らせ電話 234六六五九

創立80周年に向けて

会長 佐々 保雄

昭和六十年（再来年）は、日本山岳会の創立八十周年にあたりますので、現在、関係者の間で着々とその準備をすすめております。

行事の概要といたしましては次のように考えております。

1 第一に文化的行事として、日本登山史展の開催、日本山岳会百年史編纂の着手、その他、講演会、記念晩餐会等を企画しております。これらの行事は中央で行なうことのほか、地域的に実施可能のものは、本部において特別予算を計上し、いくつかの地域ブロックにおいて、中央と地域合同にて実現いたしたく、よってもって本部、支部の一層の交流を目指すものであります。

2 第二に日本で最も伝統ある登山団体として新進登山家の育成をはかり、八十周年を記念してヒマラヤ登山、即ち、カンチェンジュンガ縦走と、五年にわたる天山々脈ボゴタ峰登山のしめくくりとして全国的規模によるボゴタ峰登山の実施を計画しております。

3 第三には、記念事業を含めての会の内外の活動の一層の活性化を期するために、八十周年を期して特別山岳基金の設置に着手いたしたく存じます。

上記の行事は単年で全て行なうことは困難な面もありますので、実施時期としては、来る五十九年春より、六十年末にかけて逐次実施していく予定であります。

これらの行事を成功させるためには申すまでもないことながら、会員各位の絶大なご協賛が不可欠でありまして、いま申し上げました特別山岳基金に予定されます所要資金二千万円の募金も早急に着手いたしたく、その節は何卒絶大なるご協力をたまわりますよう、切にお願い申しあげます。また、行事内容についても、上記のほか有意義なご提案を事務局までおよせ頂ければ幸甚に存じます。

昭和五十八年十二月三日

年次晩餐会出席者

(招待)
村井米子　浅原重継　関根吉郎
鈴木正俊　Capt. M.S. Kolhi
(北海道)
平野　明　兼平治水　亀井秀子
柳田凉子　横田春雄
(岩手)
佐藤敏彦　本田宏彦
(秋田)
岡田光行　北林嘉鶴子
佐藤兼治　佐藤満子　福田文二
(山形)
後藤幹次　村上勝太郎
(宮城)
岡田幸千生　熊谷正志
熊谷藤子　伊達篤郎　平沢亀一郎
(福島)
河上鎌治　鈴木松三
清和良晴　中嶋正夫　野地克也
(越後)
青木英治　金山淳二
倉島正吉
(信濃)
佐藤一栄　上条敏昭
蒲生明登　丸茂キクエ
里見清子
(山梨)
山村正光
(静岡)
加田勝利　西郷正郎
庄司長生　長谷川広司
柴田昌亮
山本朋三郎
平井　泰　川北　仁
(東海)
鹿野勝彦
簡井　稔
湯浅道男
(岐阜)
今西錦司　森本市郎
(富山)
若林啓之助　若林妙子
(関西)
今西寿雄　岩坪五郎
岸田権二　小林治俊
入谷浩右
斎藤惇生　宗実慶子
河野之保
(山陰)
港　叶
新貝　勲　吉村健児
(福岡)
野口秋人
西沢健一
(東九州)
青木　昇　網倉志朗
赤松功也
(熊本)
荒野康子　浅野孝一
(一般)
今井喜美子　今村正二
岩崎三郎　入沢郁夫
石川治郎　伊藤信夫
岩堀瑞子　石橋正美
岩橋崇至　板倉健二
今井田研二郎
穴田雪江
秋山光平
板倉勝正
飯野　亨
伊丹紹泰
市村洋子
井村桂子

石田要久　伊藤文三　糸井正之
梅野淑子　宇津力雄　内山修一
上原国男　榎本　進　遠藤光男
遠藤恵大　織内信彦　小倉董子
小倉茂暉　織田沢美知子　大森薫雄
岡部みち子　岡村治信　岡本龍行
大倉昌身　小倉　厚　小島守夫
小花朋子　岡沢祐吉　小倉由美子
及川　昭　沖永　裕　岡田邦三郎
小田　稔　大峰芳枝　荻原賢司
小田知枝　小野口道男　大島康弘
大越陛助　小野利次　越智英夫
大塚博美　小原晴子　岡本道生
奥　徳子　大河原由紀子　太田晃介
大沢伊三郎　加治甚吾　風見武秀
川森左智子　金坂一郎　神原忠夫
神崎忠男　片岡　博　片山全平
菅野弘章　大河原由紀子　太田晃介
兼山信次　川島新太郎　金子誠一
川津鉄礼　金田好司　金山陽子
上仮屋正和　神山良雄　神山良雄
木下是雄　菊地文雄　梶浦敏雄
木島英一　絹川祥夫　北村節子
黒石　恒　栗原敏起　国見利夫
黒川　恵　見学　玄　久保孝一郎
小島隼太郎　河野幾雄　国分勘兵衛
小林　碧　小池良吉　小塩丘平
小西政継　児玉　茂　小坂　丞
越田和男　小松原一郎
佐藤テル　佐々保雄　桜井信雄
佐藤佳年　佐藤文二　坂倉登喜子
斎藤かつら　三枝礼子　斎藤健治
斎藤冬喜　佐竹春江　佐藤　節
坂本正智　斎藤直信　佐藤知恵子
鴫原啓佑　三辺夏雄　進藤波男
重広恒夫　島根康郎　清水一郎
周布光兼　重村　清　島尾久子
鈴木一弘　杉浦雄治　鈴木　昭
鈴木郭之　菅野時子　砂田定夫
関口周也　杉本義信　鈴木雄二
関塚貞亨　瀬川忠四郎

田口二郎　谷口現吉　高橋　照
高橋定昌　田村扇一　高橋　宏
竹田寛次　高沢光雄　高橋庄一
高遠　宏　高橋　聡　田部井淳子
高田真哉　宅間清子　滝川　清
田村協子　高沢英雄　高橋晋作
竹内　孝　田村宏明　滝沢ちよ子
田尾　正　武内紀子　田中賢治
千葉保之　鶴岡元之助　辻　荘一
都竹祥子　田　仁代　外山義夫
鳥居　亮　徳永芳雄　鳥居寿興
徳久球雄　中屋健一　中村純二
長尾悌夫　中名生正昭　中島信一
中村あや　中村太郎　中川公夫
中河与一　西堀栄三郎　錦織保清
西村政晃　西　春彦　沼倉寛二郎
野田三郎　浜野正男　浜野吉生
原田幹市　早川瑠璃子　早川義郎
原　謙一　長谷川良典　橋本しおり
橋本　清　広羽　清　日下田実
平柳一郎　広谷光一郎　平井和雄
平井吉夫　平戸孝夫　平野隆司
平井祐子　広瀬由昌　船越好文
福原健司　藤江幾太郎　古川利雄
古川竹世　藤井正彦　堀田弥一
堀川　清　堀井昌子　増田洋子
松家　晋　牧下一巳　前田文彦
牧　潤一　松原　靖　丸山直子
松村　潤　松田雄一　宮下啓三
宮下秀樹　宮本信一　皆川完一
三谷統一郎　村山雅美　村田恭邦
麦倉　啓　村木潤次郎　望月達夫
望月　孝　本吉　博　山崎金次郎
山口健児　矢沢義弘　山崎安治
八巻　寿　山田二郎　山野井武夫
山口一孝　山本良子　山本良三
山岸和夫　山崎　健　山崎勝巳
山崎　登　湯川龍二　尹　官炳
吉沢一郎　吉武正子　吉野正敏
吉田　宏　吉田　実　芳野満彦
芳野赳夫　渡辺兵力　渡辺誠司
渡辺宏之　渡辺立男　藁科光雄

（以上三三五名）

新名誉会員

村井　米子氏

（会員番号三〇〇一）

明治三十四年十一月二十三日生れ。東京女子大学国文科卒業。

大正六年夏の富士山登山をはじめとして、同七年夏、木曽御岳山、八年夏、立山、九・十・十一年夏、上高地周辺、十年、妙高山・火打山スキー、十二年、白馬岳春スキー、同年夏、八ケ岳、岳沢より穂高・槍縦走、十三年冬、富士山、尾瀬、十四年冬、蔵王山スキー等々、日本における女性登山家のパイオニアとして活躍。その後、四季の日本各地の山々に登り、戦後はスイス・アルプス、ヒマラヤにも足跡を残した。

昭和二十二年四月、本会入会。評議員、婦人懇談会委員長、自然保護委員会委員等を勤め、会務に貢献するところが大きかった。また日本自然保護協会、国立公園協会、緑の地球防衛基金協会、文部省登山研究所運営委員等でも活躍した。

氏は入会前より、柳田国男・小島烏水・木暮理太郎・冠松次郎氏らに私淑し、松方三郎・武田久吉・槙有恒・日高信六郎氏らに同行した登山が、思い出深い山行として強く印象に残っているという。最近は、深い緑につつまれていた昔の山を想い、登山歴六十年の恩返しとして自然保護の運動につくしたいと、氏の抱負は大きい。

著書に、『山の明け暮れ』、『雪山のあけくれ』、『山岳の驚異』、『山愛の記』、『山恋ひの記』等がある。

新永年会員

本会に永年会員の制度があり、継続在籍五十年以上の会員がそれに該当し、毎年、年次晩餐会に於て永年会員章が授けられることになっている。本年は左の五氏がめでたく永年会員に選ばれた。会の長老として、今後のご活躍を期待したい。

浅原重継氏　（一四二四番）
明治三十七年二月十七日生
東京商科大学卒業
昭和八年二月入会
紹介者、矢作太郎・田中菅雄

奥　貞雄氏　（一四三二番）
明治四十四年三月十日生
京都大学法学部卒業
昭和八年三月入会
紹介者、渡辺漸・槙有恒

永井俊三氏　（一四五三番）
明治三十六年十一月十七日生
関西大学中退
昭和八年六月入会
紹介者、渡辺小兵衛・頭井豊治

関根吉郎氏　（一四六九番）
大正四年八月四日生
早稲田大学卒業
昭和八年九月入会
紹介者、木村恵吉郎・角田吉夫

鈴木正俊氏　（一四九四番）
大正六年九月十八日生
早稲田大学卒業
昭和八年十二月入会
紹介者、斎藤威三男・神谷恭

忘年会

共催　婦人懇談会
集会委員会

恒例の忘年会は、十二月九日に「美人懇談会」と銘うって、ルームで開かれた。

会長の食いしん坊を自負する挨拶と、仙台から出席された平沢氏の乾杯の音頭によって、宴は始まる。

当夜は、名だたる酒豪精鋭が揃い、前半は個人主体の立食で、静かに升の酒杯が重ねられてゆく。酒は婦人懇談会心づくしの山にまつわる銘酒で、〇〇山の酒は十指を数えて圧巻だが、それを呑まんとする面々の野獣に似たまなざしも壮観であった。御馳走もテーブルに溢れて、酔眼にはその名の記憶もおぼつかない。

宅間女史らの料理の腕前も絶佳で、こんな女性を妻にもちたいものをと思いながら、熊谷女史の作った冷いクレープを存分に食う。

このルームの空気は不思議なものだ。壮年も老年も、明日の山を語り、訪れる夢に没頭して、期待通りに確実に夫々の山に身を馳せ、またこのルームに帰ってくる。そして胸にあたためた珠玉の思いを披瀝しあって、今日ここに主催者の心のこもった馳走と美酒に酔いしれるのである。

宴なかば、長老のドイツ歌曲のテノールが朗々と響き渡って、恋のときめきの静けさのあとに、若者の放吟の歌舞が始まると、熱気の宴も終焉に近づく。

片隅ではM氏が絵筆を片手に商売を始めた。升杯の底に乞われる山は見事に描かれ、所望の列がつきない。

こんな折、彼岸の筈見さんの話も出たが、小さな声は放吟に途絶えた。

全員が輪に結ばれた。いよいよフィナーレである。私は女性の小さな肩を抱いて、山の歌を二度うたった。

恒例の交換プレゼントは、この原稿用紙とボールペンと、執筆依頼とであった。出席者四十三名。

（平柳　一郎）

昭和58年の物故者

謹んでご冥福をお祈りします

二一	辻村	太郎	7・15	五五五二	皆川	文弥	6・6
二四五	矢田城太郎		4・18	五九四四	岩佐	康夫	1・
九一〇	二木	信次	9・6	六八三五	樋口	明生	4・19
一二五七	加藤	泰安	4・24	七〇三九	坂戸	勝巳	5・21
一二八四	加藤	恭平	5・21	七二七七	島尾	智恵子	9・14
一五五三	今川	良雄	10・11	七四七四	立田	実	
一七五五	折井	健一	9・29	七八七四	筈見	愛子	10・2
一八三二	林	和夫	9・25	八一二八	山田	信義	7・12
一九一四	大塚	武	8・29	八二六二	禿	博信	10・9
四一七六	牧野	文子	6・8	八五六二	望月	喜儀	3・19
四二六四	白石	慶子	2・3	八五七五	石坂	一郎	5・16
四九五六	中村	光三	3・12	八六四七	中島	孚	10・20
五〇八八	陳	光漢					

（会員番号順）

クル渓谷からの帰路

三田幸夫

一九三一年の一月から二月にかけて、僕はインド西北辺境のクル渓谷マナリ村で、のんびりした一週間ほどの休日を楽しむ機会を得た。

その十日ほど前、国境のロータン峠でひどい吹雪に遇い、かなりの食糧、天幕、寝袋、その他の装備一切を雪上にデポしたまま、マナリ村に引上げた直後のことであった。が、幸い連れて行った村選り抜きの猟師十名は、誰一人決定的な凍傷にもやられず、全員無事に村へ帰りついたばかりの時であった。

僕は、土地のサン・ライズ果樹園を経営するベノン陸軍予備大尉が所有する、バンガローの別棟を借りていたわけだが、大尉は、僕が退屈しているだろうと、毎晩のように膝を没する雪を踏んで、僕の部屋へ遊びにやって来た。

僕の部屋には、会社の取引先の船会社から餞別に贈られたウィスキーが、まだ五、六本転がっていた。大尉にとっては、こんな山の中で貴重なスコッチにありつけるとは、夢にも思わなかったことであろう。

僕達は、煖炉によく乾燥した太い樺（かしわ）の薪をふんだんにほおり込んだ。薪はバンガローの入口に、軒まで届く位高く積み上げられている。

大尉がぶら下げて来た雉子の丸焼は最高のご馳走であった。彼の話によれば、ちょっと谷筋から奥に入れば、雉子、山鳥、兎等は一時間もかからぬうちに何羽もお土産に持参できるのだと、自慢気であった。もっとも、あとで村人の話によると、彼は名うてのハンターなのだということであった。

水割りのグラスが何杯か空になる頃には、煖炉の熱さで襯衣一枚になってしまう。そして僕の頭の中には、雪の穂高や立山の姿の中に、なつかしい旧い仲間が後から後から顔を出す。

大尉もその頃には、すっかり出来上って、お得意のイッツ・ア・ロングウェイ・ツー・ティッペラリーを歌い出す。第一次世界大戦の後、ずいぶん長年の間世界中に流行った歌である。大尉はクルの山奥からこの大戦に参加し、数々の手柄を立てて帰還した古強者である。僕もこの歌はよく知っていたので、二人での合唱は誠に楽しかった。

Up to mighty London came an Irishman one day. All the streets are paved with gold, so every one was gay. Singing songs of Piccadily Strand and……

It's a long way to Tipperary.
It's a long way to go.
It's a long way to Tipperary.
To the sweetest girl I know…

だが、僕のクル休日も残り少なくなり、そろそろ腰を上げなければという日が近づいてきた。そんなある日、大尉が改った顔付きでやってきて言った。実は次兄のハーバート（果樹園のパートナー）が、村で野犬に咬まれ、狂犬の心配もあるので、ラホールの病院で手当を受けねばならない。ついては、三田さんにラホールまで同行してもらえないか、という依頼である。

僕は勿論快諾、翌早朝いつまた訪ねられるか解らぬマナリ村を後にして、ハーバートとの二人旅が始まった。二人は、歩いたり馬に乗ったり、運がよい時には羊を運ぶトラックに便乗したり、賑やかな村や町を克明に見物しながら、四日目にラホールのハーバートの友人宅に着いた。

熱心に宿泊と滞在を奨められたが、僕は厚意を謝して、ラホールとアムリッツァーの町や古い城跡の見学に出かけた。二つながらパンジャプ州の二大都市で、アムリッツァーの黄金寺（ゴールデン・テンプル）は、かねがね僕の見物したい名所であった。

その夜、僕はアムリッツァーを見物し、町中の小さなホテルを探して泊ることにした。粗末な部屋に通され、やっとほっとして寛ぎかけると、入口のドアーにノックの音がした。宿の者が何かの用でも聞きにきたのかと、おはいり（カミン）と答えると、入ってきたのは、小柄な、薄汚れたシャツとズボンの、少々眼の鋭い二人のインド人である。

差し出した名刺を見ると、ラホール警察の特高らしい。用件を聞くと、僕の旅行の目的、模様等について色々と聞きたいという。山登りの話をしたところで、解る相手ではないので、自分はカルカッタ在住の日本商社人だが、新年とクリスマスとの休暇を利用して、クル渓谷の美しい景色を見物にきた帰りの途中なのだ、とできるだけ世間話等を交えて、リラックスに努めた話が一時間も続いた。多少英語や印度語も解るし、相手も段々打ち解けてきたようなので、シガレットを奨めたが、ノー・スモーキングと言って手を触れなかった。それでも二人は、最後に「お休みの所、大変お邪魔してすみませんでした」と丁寧に挨拶をして帰っていった。

僕は宿の余り上等でないカレーをとり寄せ、半分ほど残っているウィスキーをちびちびやりながら、心も軽くなった思いで、一人きりの夕食を楽しんだ。

そして明朝はまた、丸二日余がかりのインド横断鉄道、パンジャブ・メールの独り旅を夢見ながら、固いベットに横たわった。

ある正月の山

織内信彦

ちかごろは、山で正月を過すというような気のきいたこともやっていないので、少しカビの生えたような話で聞き苦しいことを承知で、古い正月の山の一つを憶い出してみることにしたい。

昭和六年というと半世紀も前のことだから、記憶は芒洋としているが、僕は同学の赤木君と、当時仲のよかった日本医科大学山岳部の原蕃、兵藤正彦両君の四人して奥穂高へ登ろうと、大晦日の早朝徳沢小屋をあとにした。日本医科大の両君とは二、三回秋や夏の穂

高で岩登りをやり、気心の知れた仲で、東京でも拙宅へ遊びに来てもらったりしていた間柄はいいとして、原君のところへ連絡の手紙を出す宛先が、なんと牛込区東五軒町藤島敏男方ということなのである。

僕が藤島さんと親交を結ぶようになるのは、それから七、八年もあとになるのだが、原君は学生時代既に藤島さんから見込まれたのが運のつき、東五軒町の藤島邸の一室に閉じこめられ、へそ曲りで有名な旦那にしごかれながら、卒業するまでそこから山へ登っていた。彼は僕と同時に日本山岳会の会員となり、いまは宇都宮で専門病院の院長をしていそがしがっているが、数年前アフガニスタンやネパールの旅に誘ったのが病みつきとなったらしく、毎年のようにヒマラヤトレッキングを楽しんでいる。

もう一人の兵藤君は、医大を出るとしばらくして前畑秀子さんと結ばれ、岐阜市に外科医院を開いたが、たしか昭和三十年代の後半病没した。夫人の秀子さんは、ベルリンオリンピックのゴールドメダリスト、「前畑ガンバレ」とアナウンサーを絶叫させ、日本中を興奮させた水泳の名選手であることは言うまでもない。

スキーも岩登りもひときわ達者だっただけに、惜しい岳友を早くなくしたと残念に思っている。

大晦日のひる頃、雪の深いコルに到着し、一気に奥穂高の頂上へ登ってから穂高小屋へはいった。当時の穂高小屋は、現在とは比較にならないちっぽけな仮小屋みたいなものであったが、その晩泊り合わせたのが、中畑政太郎を伴った学習院の加藤泰安君、槍から縦走して明日は西穂高へ行くという。もう一組がやはり槍から縦走してきた堀田弥一さんの一行、今田由勝を伴っていた。中畑、由勝両人とも僕は良く知っているガイドだったので、その晩の飯などは連中に炊いてもらって、横着をしたことを覚えている。そのほかに岳沢から登ってきた今井田研二郎氏の率いる松本高校のグループがいた。

こういう面々と焚火の煙りに攻められながら、僕などは狭い小屋の隅の方で小さくなっていた。一夜明ければ昭和七年の元旦である。二日続きの好天を幸い涸沢岳へ登り、泰安一行のトレースのあとを北穂高の方へ少し行ってから、スキーをデポしてあるザイテングラートへ戻った。

徳沢へ帰ったその晩だったか翌日だったか、夜おそくひとり炉端で暖をとっていると、入口の扉をガタガタと開けて雪まみれの二人づれが入ってきた。見ると日大時代の初見一雄さんである。どこから、と聞くと槍からだという。こんなおそい時間に変だなと思ったら、槍から南岳を越して横尾谷を輪カンで下ってきたという話だった。

初見さんとは、夏の上高地の丸西で酒をつきあわされ、いたく酩酊した僕が梓川の水で顔を洗って出直したことがある。一枚も二枚も格が違うようだった。

どうしたわけか、徳沢へ帰った晩あたりから僕は痔をおこした。はじめてのことで、寝返えりもうてないくらい痛い。経験者でないとわからないが、呼吸をすることも苦痛なのだ。原君たちに、痔は温泉で暖めれば治るとすすめられ、スキーをはいて上高地の清水屋へ行って湯につかった。なにしろ、医者の卵がそう言うんだから信用するよりほかはない。温まっているうちはよかったが、帰路二時間も寒風にさらされ、スキーを動かして徳沢まで戻ってきたら、前よりもひどくなってしまったのには驚いた。とうとう四日間ばかり徳沢で寝てしまった。

北尾根を狙っていた今井友之助さんと顔を合わせたのもこの時だったと思う。まもなくして、学校が近いため山岳部の間で隣組みたいな関係にあった青山学院の原田君の一行がやってきたので、一緒になって徳本峠を越して島々へ出たのは、それから何日かしてからであった。

時代が違うからとはいえ、こんな静かな北アルプスの正月は、今日では想像もつかないだろうと思う。しかし、この小文に引合いにした人達のうちでも、加藤、兵藤両君を始め、中畑、由勝も既に鬼籍に入ってしまっているし、世話になった源兵とか、茂平ぢいさんなど徳沢小屋の冬番ももうこの世にいない。そう思うと、歳月の流れの早いことに、自分自身が馬齢を加えていることをあらためて知らされているようで、今更のように驚いているわけである。

ヒマラヤ迎春
てんまつ記

蜂谷 緑

私にとって忘れられない正月といえば、何といってもヒマラヤトレッキングの途中、タトパニで迎えた新春である。

あれは一九七六年十二月のことだった。JAC図書委員会の有志によるトレッキングが計画され、私も無理を言って同行させてもらうことにした。

旅程は、カトマンズから空路ジョモソンに飛び、ムクチナートを往復したのち、カリガンダキの谷をポカラに向って南下するというものだった。山本良三さんが隊長で、河村栄二先生もドクターで参加されるという。総勢十四人、男性が多い中に、北島光子、北林嘉鶴子、福田光子さんらが加わって和やかなムードとなった。

私たちのトレッキングは、ジョモソン空港への到着がおくれたために、第一日目から番狂わせが生じ、以後、連日夜まで歩くというハードな行程となった。それでも〝鳥葬の国〟を目のあたりに見、氷雪に輝くダウラギリ山群を仰いで、毎日が感動の連続だった。石積みの家が並ぶマルファ部落、隊商の町ツクチェなどを通過して、大晦日には、熱い水の湧くタトパニで幕営する手はずだった。ところが私たちの一行が大幅におくれてタトパニに着いたとき、予定していた幕営地には天幕をはる余地はなかった。そこで私たちは、旅籠とでも呼びたい土地の宿屋に部屋をとり、年越しの宴会だけは、宿の中庭に車座になって行うことにした。

夜空に浮かびあがるニルギリのシルエットが私たちを見下していた。地酒ロキシーの酔いがまわると、日本に残して来たもろもろの

『山日記』をご愛用下さい

しがらみを忘れて、自分の心が飛翔していくのを覚えた。ポーターたちがうたう〝シェルパ・テンジン〟をたたえる歌が、そうした思いをさらに高揚させるのだった。

元旦は快晴で、昨夜見たニルギリが初日をあびてバラ色に輝いていた。

この谷すじは、正月といっても春のような暖かさで、蜜柑がみのり、菜の花も咲いていて私たちを喜ばせた。河べりに住む人たちも、気候温暖な土地柄のためか、貧しいながらのどかな表情をしていた。

ゴラパニ峠でダウラギリと別れをつげ、私たちはアンナプルナや、新たに見えて来たマチャプチャレを道づれに歩き続けた。袋を背負った騾馬やドンキイの群が、鈴の音をひびかせて過ぎていく。ムクチナートからカトマンズまで、もの言わぬ彼らも黙々と旅を続けているのだ。

ポカラに近い河原を歩いているとき、先方から箱をかついだ一団が現れた。「葬式だ」と一人が叫ぶと、早足になった。河べりで珍らしい風習が見られるのではないかと期待したが、近づいてみると日本製のミシンを運搬していたにすぎなかった。

青空に尾をひるがえすマチャプチャレが、もっとも美しく見える町、ポカラで私たちの旅は終った。

私たちはあわただしく帰途についた。ポカラへ着く直前、行きあった日本人トレッカーの口から、私たちが予約していたエアサイアムが倒産したことを知らされたからだ。

さて飛行機はどうなるのか、と気にしながらバンコクに着くと、エアサイアム機は空港に翼を休めたまま一向に飛ぶ様子がない。もはや給油も整備もストップされて、身動きできない様子だった。

私たちはホテルに収容されて、飛行機が飛ぶのを待った。難民さながらに食券で食事をして、日中はのんびり市内見物をして過ごした。予定外のバンコク滞在は、それなりに楽しかったが、休暇はもう終ろうとしている。会社や学校のことが気になりだしたときには、帰りの便を失った人たちの間で搭乗券をうばいあう事態になった。しかも料金は、日に日に高騰していく様子だった。

急を要する人たちから順に帰ることにした。最後は、全員が有り金はたいて航空券を買い、ほうほうの態で帰って来た。

私にとって一番豪気だったヒマラヤの正月は、航空会社の倒産という未曽有の幕切れで終った。が、「墜落よりいいよ」と今では、仲間たちの間の語りぐさになっている。

ラダック報告（四）

山本朋三郎

ラダックとは、チベット語で「峠を越えて」の意味であるとのこと。と言うと、何かムード的な響きがあるが、昔は大変な、山また山の山越えであっただろう。一九〇六年、スウェン・ヘディンがインダス河源流探査に、スリナガルからレイに入っている。

スリナガルは古くから東西交通の要地だ。紀元前三世紀、アショカ王によって仏教使節が送られ、ガンダーラと並んでカシミール地方には、仏教寺院百ケ余、僧侶五千を超える仏教国が栄えていた、と七世紀に一ケ年スリナガルに滞在した玄奘三蔵が書いている。

しかし今日ではカシミール地方には、仏教の匂いは消え失せている。十四世紀、イスラムの王が此の地方を支配し、偶像破壊者として名高いスルタン・スイカンダルの時に、仏教、ヒンズー寺院は徹底的に破壊された。カシミールではとっくに失われた仏教文化が、歴史の冷凍庫に永い間眠っていたのがレイである。

すべての宗教がそうであるように、仏教も世紀を超えて発展し、堕落もし、衰頽もした。シャカの教えを民衆にひろめる過程で、多くの教団、宗派が派出した。四世紀頃、当時の世界思想の最高峰に達していた仏教も、七世紀頃、インド辺境のイスラム諸国の興隆に押され、インド諸王国は民衆掌握に、心を配らねばならなくなっていた。元来、インドの民衆宗教を批判することで、シャカの説いた仏教は、本質的には世界宗教であった。インド諸王国の宗教政策も、当時の政治事情から民衆の宗教としての、ヒンズー教となれ合わざるを得なくなり、元本的仏教は衰頽、変質の途をたどり始めた。

この変化を仏教の新しい発展としてとらえたのが真言密教であり、何とこの真言密教の流れは、日本の真言宗と、ラダックのレイ地方にしか完全な姿で現存しないと言われる。在家信者にもなれない、殺生・飲酒・喫煙もする私には、宗教の儀式・教典のことは判らないが、レイのゴンパに入ると何等の違和感もなく、むしろ落付く感じがするのも、親代々仏教のムードに何となくドップリつかっているからであろう。

チベット人、ニマゴンと言う人が西紀九〇〇年頃にラダック王国を創り、インダス河北岸の大扇状デルタ地に、ヒマラヤ・カラコルム越えの隊商交易の一大拠点を作った。そこがレイである。一八三四年カシミール藩王の遠征軍に領土併合され、王国は亡びた。しかしながらラダックの人達の宗教をかえることはできなかった。

レイの裏通りの雑貨屋で、スリナガルや他の地域等でするように、値段を値切ったら、「俺達はラダック人だ。スリナガルなどのカシミール人のように吹掛値はしていない」、と胸を張った老店主の返事に、此処は真言密教を生活の基盤としているチベット人の土地だと痛感。せまい裏通りの旧道の商店街に、独特の左右にはね上ったひだの付いたチベット帽を、チョコンと頭にのせた、買物客の主婦は、皆、鍵を一つか二つペンダントのように首から胸に下げている。玄関・戸棚・物置等のカギである。

制度としてはないが、チベット人には一妻多夫が多いと言う。人口増加を養える食糧の乏しい、苛酷な大自然の高地に住む彼等の、自然に帰納された婚姻形体である。富や宝の管理は妻に任され、立派な鍵のペンダントは妻の権威の象徴なのである。真鋳製の重たげなピカピカに磨かれた金色の鍵は、夕陽にキラリと美しく、主婦の絶対の重さを感じさせられる。

私の滞在した、ラダック・ゲス

カナダ山岳会元会長夫妻を迎えて

カナダ山岳会元会長ボブ・ハインド氏夫妻から、アンナプルナ・トレッキングへの途次、東京へ立寄るとの来信が九月にあったので、日加山岳人の親善交流を深めるのによい機会と考え、佐藤テル海外委員長に相談したところ、快くお迎えしたいとの話であった。

カナダ山岳会は日本山岳会に遅れること丁度一年、一九〇六年に創立され、ハインド氏は一九三三年に、夫人は一九五二年に入会、一九六六年から一期会長に就任、現在名誉会長である。同夫妻と同会々員ジム・タラント氏は予定通り、十一月一日成田着、翌二日夕刻本会を来訪された。

さて、当夜は海外委員会が中心となり、遠来の客を迎えるに相応しく、美しい花が飾られ、ビュッフェ・ディナーとして自由な語らいの場が設けられた。早速田村理事が図書室にご案内し、本会の概略を説明した。佐々会長、田口副会長、三田元会長、吉沢欧米担当委員も出席し、心からなるおもてなしと、和かな雰囲気のうちに、時を忘れ、岳人ならではの歓談が続けられた。

三田元会長が槙元会長等と一九二五年に初登頂されたマウント・アルバータの写真やら、その後二十三年を経て第二登を果たされた米国のオパーリン、アイレスの両氏から記念に当会に送られて来たピッケルなどが展示され、ハインド夫妻共々出席者一同、当時の感激を新たにしたのであった。

お別れに際し、佐々会長から記念品としてクラブ・タイ並びにクラブ・ペンダントが贈られ、又赤い楓を中心にした出席者一同の寄書が贈られた。ハインド氏等はこの思いがけない本会の歓待に心から感謝され、別れを惜しみつつ辞去された。

（出席者）佐々保雄、田口二郎、三田幸夫、吉沢一郎、佐藤テル、田村俊介、松田雄一、宮下啓三、黒川　恵、松沢節夫、関口周也、鈴木郭之、栗原敏起、大津浩、早川瑠璃子、稲勝代、小倉由美子、武内紀子、岡田久美子、斎藤健治

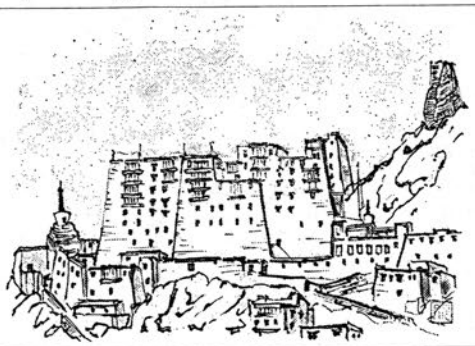
（斎藤　健治）

画・宮下啓三

トハウスの主人、アクバアさんの、物静かに奥さんと話をする態度も、気のせいか、ピカピカに磨かれた沢山の水カメ、皿、ヤカン等が壁にギッシリ並べられた台所を守る奥さんの機嫌を伺って、用事をたのんでいるように思われて仕方なかった。奥さんも物静かな三十代の女性である。この夫婦は一般のチベット人より丈高い立派な体格である。祖先でカシミール人の血が入ったらしい。名前もマホメッド・アクバアである。中学生の長男が英語がうまく、客との応対は十四才の彼の仕事である。マホメッド・アッバスが名前であり、瞳が青い。

日本から持参のウィスキーはとっくに飲み干してしまって、一週間ほど酒切れで、イスラムのスリナガルから、チベットのチャンをたのしみにして来たのだが、世話になったラダック・ゲストハウスの主人に、ネパールで味を占めているチャンはないか？　とたずねたら、「酒は気狂の水と言われ、政府でも取締っている。私の家にはない。裏町で売っているが、不潔だからよしなさい」と真言密教の飲酒戒を授けてしまう。遂にレイ滞在中は一滴の酒にもめぐり合えなかった。日本で粉末の日本酒が発明されたニュースをラダックの宿で思い出す。

メイン・バザールのヒマラヤ・レストランに行っても、勿論酒類は販売していない。レイの若者達のゴッタ返えす食堂は、安くてうまい。客の注文を小さな紙切れに書いて、給仕君が調理場へその紙切れを持って行く。大体間違いなく注文の品が来る。注文伝票を置いて行かず、テーブル番号も記入してないメモである。会計所には手提金庫が蓋を半開きに置いてあり、食事時の混雑時には、支払伝票を置いてないので、客の申告する料理名で代金決済をしている。何ともおおらかな商売である。片手に紙幣を握って、ツリ銭を握った束から無造作に入れたり出したりしている。中食時には二人掛座席へ三人掛けで土地の連れはたべている。何しろ良く客の入る店である。ラダック語は判らぬので、客の私達は注文した品と金額明細のメモを作って、金と共に店主に渡す。こんなことをする客は初めてであるのだろう、ニッコリと主人がほほえむ。



レイの王宮

支払代金二十一ルピーなのだが、生憎十ルピー以下の金の持合せがなく、三十ルピーを渡す。店主の方も小銭不足とみえ、次回いつ来るか判らぬ客に、「一ルピーはこの次でよい」と言う。立つ客を待つ次の客や料理の仕分けに多忙で、頬を上気させている店主も一ルピーどころではないらしい。おおらかな食堂経営である。客を信じ込んでいる店主。客を信じることは菩薩思想であり、請求伝票を置かず、客の食べた申告で代金決済をすることは、日本では考えられぬことである。翌日、中食に行った折、席につく前に昨日の借りた一ルピーを支払ってから注文。主人の方はすっかり忘れていたらしく、「オー、オー、サンキュウ」。

レイを去る前日、通りで「ジュレイ！」と声をかけた男がいた。私は咄嗟に思い出せず、反射的にジュレイ（今日は）と返事。しばらくしてヒマラヤ・レストランの主人だったことを思い出す。仏教のおしえを現実生活に、無意識に行なっているとしか思えぬレストランである。余り清潔とは思えぬが、精神的にスガスガしいレイの食堂であった。

（続く）

ラインホルト・メスナーに下された判決

岡沢祐吉

一九七四年八月号の山岳雑誌『アルピニスムス』には次のような記事が掲載されている。

「一九七四年五月十六日に出たミュンヘン高等裁判所の判決で、ヘルリッヒコッファー博士とビッターリング両氏は、ラインホルト・メスナーに対する無効宣告請求権を獲得した。原告はさらに判決により被告人の費用負担で『アルピニスムス』に公告の形で無効宣告を公表させる権限も与えられた。出版物の中でなぜ『アルピニスムス』がよりにもよって決定されたかは次の判決文による。〝当裁判所は雑誌『アルピニスムス』が無効宣告を載せるにふさわしい出版物だと思っている。なぜなら、これは当該事件に一番関心を持っている登山者たちに最も公正に周知させ得る出版物だからである。当裁判所は他の出版物に公告させることはしない……〟

編集としては一九七〇年ナンガ・パルバート遠征隊の訴訟にかかわるなどの論評も差し控える。」

そこでこの公告の全文を紹介する前に、この事件の概要を少し説明してみたい。

一九七〇年にナンガ・パルバートへ遠征したこの隊のメンバーの一人、ラインホルト・メスナーはヘルリッヒコッファー隊長との申し合わせに手違いが生じ、単独でナンガ・パルバートへ向かうことになった。この時、ライホルト・メスナーは自分の後を追って来る弟のギュンターに気づき、やむを得ず二人でナンガ・パルバートの頂上へ向かうこととなる。頂上からザイルなしでルパール側を下降することは弟には無理と思えたので、反対のディアミール側へ降りることとした。途中二回のビバークをはさんだこの時の下山で、兄についてゆけないギュンター・メスナーは、ママリー・リッペの下で氷なだれにやられ遭難死した、とラインホルトは書いている。

ビバークを含めたこの時の様子はこの年の『アルピニスムス』（九月号）に寄せたメスナーの手記から解るが、この手記はヘルリッヒコッファーが公表した報告書に、手違いの生じた赤いロケットによる合図のことが何も書かれていないので寄せたもの、とメスナーは書いている。これによると〝赤いロケットを打ち上げて合図をした時は悪天候を意味し、翌日、ラインホルト・メスナーが単独で登頂を目指す。青いロケットなら好天を意味し、予定した四名で登頂を試みる〟という約束であったという。メスナーのいた第五キャンプは無線連絡がとれないため、あらかじめこう決められていたらしい。

この手記の載った『アルピニスムス』には編集者の追記があり、ヘルリッヒコッファーはギュンターの両親に慰めの言葉も、手紙も上げていないと非難している。

メスナー兄弟の登頂と弟のギュンターの死と、兄ラインホルトの奇跡的生還は外電でも伝わっていたろうし、その頃の西ドイツでは優れた登山家を待望してもいたので（この年の二、三月にかけて、日本人グループはまたも雪嵐を突き、アイガー北壁を完登した）、この時とばかりに話題を大きくしていったようにも見える。

ヘルリッヒコッファーは、メスナーの書いたこの手記を見て、早速メスナーに手紙を書き、この手記の内容を訂正するように、と期限を切って促した。要求に応じなければ法的手段を執ると書き足した。ヘルリッヒコッファーが『アルピニスムス』に宛てた手紙には「赤いロケットは悪天候を意味する合図で、単独登頂を認めたものではない」と書いている。この手紙を受けた編集部はその時の隊員たちに質問し真疑を確かめたらしいが、ヘルリッヒコッファーに対する不信感はさらに高まっていったようである（『アルピニスムス』十月号）。それとは逆に、メスナーに対する高い評価はゆるぎないものとなっていく。

一九七〇年十二月、登山者百五十人ほどが南ドイツのウラハに集まり、この件について討論会を開いた。主催者はヘルリッヒコッファーにも弁明の機会を与えようと彼にも出席を要請した。しかし出席はしなかった。このことでヘルリッヒコッファーは完全に無視されることになった、と一般的にも考えられている。その次の年、チロルの登山隊とマナスル南面を狙ったラインホルト・メスナーが、参加した隊員の全てから好意的にみられたことは『マナスルの嵐』（メスナー著）を読めば解る。

この間にヘルリッヒコッファーは自分を訴えた上、契約を破ったラインホルト・メスナーを相手どり、逆告訴へと踏み切っていた。

冷い世間の目は、こうして四年間、ヘルリッヒコッファーに対し向けられていたことになる。

日本の裁判と同じように、西ドイツでも裁判には年月がかかるようだ。皆がこの事件を忘れてしまったような四年後の一九七四年五月、この判決が出たわけである。

≪公告≫

ラインホルト・メスナーは無効宣告をしなければならない

ミュンヘン、ドイツ海外遠征協会のカール・M・ヘルリッヒコッファー博士およびアルバート・ビッターリングは、一九七四年五月十六日のミュンヘン、バイエルン高等裁判所の判決 6u3951／73により、次の権限を与えられた。南チロル、フィルネース、ザンクト・ペーター七四に住むラインホルト・メスナー氏の費用負担で、『アルピニスムス』に同氏の左記無効宣告を公表することである。

＊

私は一九七〇年のナンガ・パルバート遠征隊隊員として、この隊の隊長カール・M・ヘルリッヒコッファー博士（ミュンヘン）に次の事実があったと主張した。

1 ヘルリッヒコッファー博士は三千メートルより下のベースキャンプからだけで隊を指揮されていた。

2 一九七〇年、ヘルリッヒコッファー博士はベースキャンプでは殆ど隊員のことを考えておいでなかった。

3 ヘルリッヒコッファー博士はフィルネースでのギュンター・メスナーの記念祭には参列されなかった。

4 ヘルリッヒコッファー博士とアルバート・ビッターリングは

一九七〇年の遠征に関する限り、準備不足だったのではないかと思います。

(a) 隊の医薬品の中にアセチルコチナのアンプルは一つもなく、一九五〇年に使われ、一九七〇年には使われていない丸薬や薬剤がありましたから、

(b) 登頂隊の酸素吸入器は取扱い方法が徹底せず、使用できませんでしたから、

(c) 登攀用ヘッドランプのバッテリーが足りませんでしたから、

(d) インスブルックでのラインホルト・メスナーの入院には保険がなく、このため保険による補償がありませんでしたから。

5

ナンガ・パルバート山頂辺でメスナー兄弟が行方不明になってから、一九七〇年の遠征隊長としてのヘルリッヒコッファー博士は、

(a) 義務である捜索活動を中止し、その上さらにメスナー兄弟を見離し、隊員からはずされました。それに、

(b) パキスタン当局に事故報告はされておらず、

(c) 万一の場合に唯一つ救出処置を講ずることのできるナンガ・パルバートのたった一枚の地図を博士だけが所有し、他の隊員にはお見せにならなかったし、

(d) まだその時機でないのに、ルパール側の総てのキャンプを撤収してしまわれました。

6

一九七〇年の遠征隊隊長として、ヘルリッヒコッファー博士は博士の判断違いからラインホルト・メスナーの凍傷部切断を招いた、と思われます。

(a) それは凍傷の手当が医学的に不充分だったからですし、

(b) 郷里の病院で早く手当を受けられるよう送り返さなかったからです。

7

一九七〇年の遠征隊隊長として、ヘルリッヒコッファー博士は、

(a) パキスタンの連絡将校に隠し、ラインホルト・メスナーに六千メートル以上ある〝ヘラン・ピーク〟初登を、他の隊員と試みる許可を出しておいでしたし、

(b) 絶える間のない雪嵐の中、隊員のヴェルナー・ハイムとゲルハルト・メンドルに、いわゆるウインチ・キャンプに留って荷上げをするよう命じておいでした。この命令にかまわず指名された隊員は下山しましたが。

以上の私の主張は当を得ていないので無効宣告をします。

ラインホルト・メスナー

海外の山

'83のヒマラヤ

片山全平

一九八三年のヒマラヤを回顧する。折々の既報分と重複するが、まずエベレスト（チョモランマ）の総括から。プレ期にはネパール側から米・西独合同隊（ゲルハルト・レンザー隊長ら二十人）は、五月七日に五人、十四日に三人の計八人が登頂、うち第一次隊のニールスンとシェルパのアン・リタは無酸素。この期のチベット側からは、米西稜隊（ロバート・クレイグ隊長ら十八人）とチリの北東稜隊の二隊。西稜隊はホーンバイン・クロワールの八一〇〇メートルまで高度を伸ばしたに止まった。ポストに入ってネパール側から無酸素で狙った日本の山学同志会とイエティ同人隊、米西稜隊（ジェームス・サノ隊長ら十六人）、またチベット側から米東壁隊（ジェームス・モリーゼ隊長ら十人）、スペイン北東稜隊、仏西稜隊（ヤニック・セニュールら十二人）と盛況を極めた。

このポスト期のエベレスト南東稜線上では、十月八日、前号既報のように同志会、イエティ同人、米東壁隊の三隊八人のつわ者が頂上を目指すかたちとなった。好天のチャンスは限られているだけに競合は予測できたことであり、一山一隊とはいえ、ルートの細分化を追求する現代スポーツ登高では、競争の原理の適用は避けられない。吉野、禿の死についてさまざまな要因があげられるが、この原理に立って登法を考慮してかからなければならなくなったことが指摘される。

ナンガ・パルバットでは、四月から九月までに十一隊が集った。日本は四隊。これに仏、西独の各二隊とオーストリア、スペイン、アメリカの各一隊。既報の通り、南西稜の福岡登高会と登歩渓流会の四人が雪崩遭難死した。日本人の初登頂に成功したのが富山県岳連隊で、谷口守、中西紀夫の両隊員が第三次の最終アタックを七月三十日、C4（七五〇〇メートル）からかけ、数百メートルを残してビバーク、翌三十一日、月明を利して午前四時すぎに登頂するという劇的なものだった。

初登頂では弘前大隊（堀弘隊長）のヒマルン・ヒマール（七一二六メートル）がある。十月二十七日南真木人、斎藤渉、高橋堅とネパール人の計四隊員が足跡を刻んだ。'83の開禁のブータン・ヒマールには田部井淳子隊がジチュドラケ（七〇一二メートル）に初登頂し、ブータン登山の扉を開いた。

注目されていたエドモンド・ヒラリー卿の令息、ピーター（二八）のマカルー西稜は、なだれで一人、転落死一人の遭難で断念した。彼はシッキムからパキスタンまでの五千キロの大旅行を十カ月かけて完成している。ヒラリー一家にとってはマカルーはどうやら鬼門らしい。

ネパール・ヒマラヤではプレに十三カ国三十四隊、ポスト十五カ国五十四隊が入った。うち二十五人（日本人七人）が遭難死した。またこの年、ネパール政府は百二十二峰の高度再調査を行い、七十二峰の修正が出されたが、カンチェンジュンガ八五八六メートル（−12メートル）、ローツェ八五一六（+5）、マナスル八一六三（+7）などの増減があった。この調査法については明らかにされていない。

新刊の山本紹介

ガネッシュ・ヒマールV

東京慈恵会医科大学
学術登山隊報告書

東京慈恵会医科大学では、その創立百年を記念して一九八〇年、ガネッシュ・ヒマール峰（六九五〇m）へ登山隊を送り、四月二十一日登頂に成功した。本書はその公式報告書である。限定出版で一般には手に入りにくいと思われるので、ここでは書評でなくて紹介にとどめておく。

隊は登山班と学術班に分かれ、登山隊長長尾悌夫、学術隊長加治甚吾両氏以下、隊員一〇名すべて医師または医学生からなり、そのようなヒマラヤ登山隊は、日本では私の知る限りほかになかった。そういう意味で、本書はユニークな本といえる。

布装硬表紙の重厚な装丁で、表見開き本峰全容、裏見開き登山隊員全員の記念写真。さらに最初の数頁は二十一葉のカラー写真で飾られ、きれいである。

本文は登山編と学術編に分けられているが、登山編は本峰登山に至るまでの経緯、交渉の資料、登山記録、登山史、気象データ等が盛りこまれており、最後に長尾さんの英文抄録がつく。

記述によれば、BCからの高度差は三二〇〇m、これを四つのキャンプでつなぎ、特にC2（四九〇〇m）、C3（五八〇〇m）間は、オコゼ岩という岩峰を巻くルートで困難だった様子である。四月二十一日、佐々木、小森、二十二日、岡部、浜口、篠原、斎藤が登頂した。共にシェルパ計五名を登頂させたが、彼らは涙を流して感謝したと。美談。

しかし本書の特色は学術編の方にある。学術論文は「高所の生理学的諸変化と自己判定法」、「高所の心電図」、「ポーターの頚椎可動域」、「タマン族の指紋」、「山岳住民の老化度と人生満足度」、「飲料水分析」、「現地臨床観察」、「トレッキング中の肺機能」、「同尿蛋白」に関する研究が九編まとめられており、その各々に英文抄録がつけられている。

就中「自己判定法」は面白いと思ったので、私は先日バンフで催された国際低酸素症シンポジウムに於て紹介させて頂いたが、これは高所での症状を採点して総合判定するというもので、発想はよいが、一般人登山隊のためにはもっと簡略化する必要があり、検討の余地がある。ポーター達は額にかけた紐で重い荷物を運ぶが、そのため首が廻りにくくなるとは気付かなかった。それが見事に計測されており興味深い。だが、それは健康に差支えないのだろうか？

山岳住民は老化度が著しいが、人生満足度は高いとか、子供に副鼻腔炎が多いという観察も面白い。

しかし全般に物珍らしさが先行しているような印象をうけた。願うらくは研究をこれで終らせず、今後も繰返し彼地を訪れて、これらの研究を更に進めて頂きたいものだ。

A5判、一二一ページ、昭和五十七年十二月、東京慈恵会医科大学山の会発行

（中島　道郎）

中高年向きの山
一〇〇コース（関東編）

浅野　孝一著

世の中が高齢化社会に入ったせいか、どうか知らないが、この頃山を歩いていると、女性とともに高齢の登山者の姿をよく見かけるようになった。単独の人もいるし、グループの人も夫婦連れらしき人もいて、それぞれ山を愉しんでいるようだ。

それはそれで好ましい現象と言えるだろうが、他方歳をとるといくら力んで見ても、若者のようなわけにはいかない。気持ちだけは若いつもりでも、肉体がついていかない。何んとか熟年向きの山を選んで行かなければならなくなって、いろいろ悩むものである。中高年の登山者の皆さんは、そんな体験を必ずしたことがあろうかと思う。だから、この本を手にしたとき、これは私にとって、とても便利なものを作ってくれたものだと思って感謝した。

本書は題名の通り、関東周辺の中高年向きの山の一〇〇コースを選んでガイドしている。内容は、奥多摩14コース、高尾・相模湖周辺11コース、奥武蔵15コース、奥秩父・甲府周辺6コース、丹沢とその周辺5コース、富士山周辺9コース、八ガ岳とその周辺5コース、西上州9コース、日光とその周辺8コース、尾瀬と南会津3コース、関東北辺の山々12コース、那須・東北の山々3コースとなっている。それぞれ詳しい親切なコース案内とともに、末尾にコースタイム、交通、宿泊施設、問い合せ先、五万分の一地図等をのせ、利用者の便益を計っている。

特に著者が、他のガイドブックと違って、中高年向きを強く意識したと思われるコースをあげると、鎌倉アルプス、北八ツ池めぐり、旧甲州街道、本栖湖パノラマ台、長尾根・品沢峠と八人峠、大奈良から桜山、三毳山から三毳神社、軽井沢から旧碓氷峠越え、中禅寺湖一周、戦場ガ原自然研究路などであろうか。

極めて正確、親切なガイドと言うべきだが、欲を言えば、一〇〇コース全部を比較してみると、かなりコースに難易があるようだ。その難易度について、何んらかの表示をして欲しかった点と、更に巻末に交通とさくいんはついているが、巻頭に、特に中高年者が登山に当り、他の若い登山者と違って注意しなければならない事項、心得といったものを掲載して安全登山を期すべきではなかろうか。

ただ、それによって本書の価値がいささかも減ずるものではない。中高年の登山者は、出かける前に本書の一読を是非おすすめする。私事になるが、私は、この一〇〇コースのうち69コースを歩いており、あと31コースは未踏である。私もいよいよ中高年の域に達した今、本書を参考として、いつの日にか全コースを辿ってみたいものだと思っている。

A5判、二六四ページ、昭和五十八年五月、山と渓谷社刊、八〇円

（小倉　厚）

アルプス青春記

朝比奈菊雄著

山の都、松本の旧制高校時代の山登りをテーマとした、古きよき時代の青春物語である。冬の穂高の稜線の吹雪のキャンプにとじ込められ、コッフェルで用をたす話など、ユーモアにあふれた茶目っけたっぷりなエピソードが次ぎ次ぎに展開されて、まことに興味はつきない。

そしてそのユーモアの裏にそこはかとないペーソスがただよっているところに、著者の暖かい人がらがうかがわれる。詩の道を歩み若くして逝った友人野村英夫の話、かき舟の少女を海軍に入隊してから故郷に訪ね、復員後少女の死を知った話など、短編小説のようなタッチでつづられており、上高地のバスガイドとの出合をテーマとした「エーデルワイス」などもそうである。

著者が松高在学中は、松高山岳部の第二次黄金時代を迎えようとする、そのきざしのみえ始めていたころで、その当時の松高山岳部の動きがはしはしにうかがわれ、その面からもまた一読に値する。二度とない青春時代のつきない追憶が浮き彫りにされており、同時代に穂高に登っていた私にとって大変なつかしい場面がいくつも登場した。よい本が出されたと思う。巻頭のピンスケこと、村山雅美氏の雪渓での写真も見事である。

A5判、二五七ページ、昭和五十八年七月、実業之日本社発行、写真十二枚、一六〇〇円

（山崎　安治）

写真集 みちのくの山

尾白　明夫
竹ヶ原陽一郎著

写真集を文章で紹介するというのは隔靴掻痒の感がある。なにしろ書店ででもどこででも本書を見かけたならば、必ず手にとり、開いてみることをおすすめしよう。A4判で二〇〇ページをこし、箱入りのずっしり重い造本だが、棚からとりだす手間を惜んではならない。本をあけたとたんに、みちのくの山々が貴方を圧倒するだろう。

朝日連峰、飯豊連峰、鳥海山、秋田駒ケ岳、八幡平、八甲田……と、四季にわたってとらえられた山々が、A4判とその見開きに展開し、私たちに東北の山の素晴しさを見せつけるのである。この素晴しさは、人によって、神秘的、心のふるさと、ロマンに満ちた……などといろいろにいいかえられるだろう。写真にそえられたタイトルを拾ってみても、「吹雪のあとの暁」、「残雪のデザイン」、「解氷の足音」、「仙境を抱いて」、「雪海を隔てて」、「雪原となる前に」、「ダケカンバ残照」と、すこぶる魅惑的である。

白籏史朗氏が序文をよせ、みちのくの山をまとめた写真集は、これをもって最初とすると述べ、努力と成果をたたえている。とかく地味な山々という先入観があって、出版もためらわれてきたのだろうが、本書を見れば地味どころか、重厚に加えて絢爛という形容さえあてはまることを知るであろう。新緑と紅葉、白雪、それに水流が見事にうつしだされている。

それぞれの写真に、撮影者が短い解説をそえ、それもみちのくの山を楽しむのには好個のエッセイとなっている。

A4判、二一六ページ、一九八二年十一月、朝日新聞社刊、七五〇〇円

（横山　厚夫）

E.T. Compton Maler und Bergsteiger zwischen Fels und Firn

——コンプトン画集——

たいへん楽しい画集である。一見写真ではないかと思われる独特の写実的な画であるが、写真にはない山の壮大さがある。

タキュール針峯からのグランド・ジョラスがある。足下からの岩場の向う、レッソー氷河を隔てて正面に聳り立つグランド・ジョラスの北壁はまさに圧倒的である。雪庇の雪の急斜面への陰、鋭い岩膚の感触など、登山家ならではの画の数々である。

岩場で苦闘しているところもある。オーバーハングを乗りきるために、足場の悪い岩棚に一人が立って両手を差し上げ、その手にもう一人が乗って、右手でホールドを懸命に摑むところである。上がプルチェラー、下がブローディヒで、十九世紀後半の大登山家が、このように登っていたのかと興味はつきない。

本書はA4より一と廻り大きく見応えがある。画の数はおよそ一六六（内カラー七）、対象はアルプスのほぼ全域だが、オーストリア発行のためか、東部アルプスに片寄ったきらいがある。

エドワード・セオドール・コンプトンは、一八四九年七月二九日ロンドン近郊に生まれる。名門の出である。六七年一家はダルムシュタットに移住する。一八七二年彼の画に感激したババリヤ出身の女性と結婚、ミュンヘンの南三〇キロのフェルダーフィングに居を構え、一九二一年三月二二日、七二才の生涯を閉じるまで住んだ。

一八七九年独墺山岳会入会、同八〇年アルパイン・クラブ会員、約四十年間に三〇〇以上の山行、ほぼ二七の初登行をしている。同行者は前記のブローディヒ、プルチェラーのほか、ツィグモンディー、クリストマノスなど当代一流の登山家たちであった。

彼の作品はイギリス、スイス、オーストリアなどのミュージアムにあるが、山岳図書に挿画として貢献した作品が多い。本書の画は主に独墺山岳会誌のもので、主文から抜粋した短文が添えてある。ただし掲載誌より本書の方が格段に美しい。これらの原画は、現在インスブルックの山岳博物館に保存されている。

「絵画史は彼の作品に正しい評価を与えないことがあるにしても、登山家と山の愛好家にとって彼は今なお山岳美の優れた告知者である！」と編集者は結んでいる。

一九八二年、インスブルック・ローゼンハイマー出版社刊、価格約一二、〇〇〇円

（今村　正二）

東・西・南・北

那須秋山山行

集会委員会

秋山山行は、十一月十二・十三日、初冬の那須三斗小屋温泉で行われた。山行というからには、朝日岳なり茶臼岳なりに登るのであろうが、今回は酒と温泉に目がくらんだ参加者ばかりで、山頂を眺めて登った気分、一目散に三斗小屋温泉は大黒屋に投宿し、酒びたりであった。

参加者は美女のほまれ高き三名（本当は四名）と、六十才超の熟男熟女三名を含む十二名。マイクロバス二台に分乗して新宿を出発。ゆったりした座席であるうえ、窓から射し込む陽ざしが心地よくウツラウツラする。途中たっぷりと酒を調達し、ロープウェイ駅着。雪である。風が強い。たった今しがたロープウェイが止まったばかりという。腹ごしらえをし、身仕度を整えて峰の茶屋を目指す。どこかの温泉に引返そうと弱音を吐く筆者に比べ、全員健脚に強風をものともせず無事に温泉着。ひと風呂浴びるのももどかしく酒である。

小屋主人の好意で石油ストーブが二台入る。延々と宴会が続き、飲んだ酒量は日本酒四升、しょうちゅう一本、ビール〇本。取り乱した者がいないのは、日頃の鍛練の賜物といえる。

夜半降雪があり、翌日は新雪を踏みしめながら避難小屋へ。二五メートルの強風の後押しを受けながら峰の茶屋着。八〇kgの巨体の持主は、その重みにもかかわらず、全身に風圧を受けて横転する一幕もあったが、無事に出発点まで戻る。

昨夜はのんびりと温泉に入る余裕がなかったので、北温泉で山行の疲れと酒気をとり、黒磯駅前の余一そばでそばを賞味する。

幹事諸氏の尽力で初雪を踏み、酒とそばを賞味し、温泉で疲れをいやし、十分に満喫した秋山山行であった。

（参加者）山崎健、高橋晋作、内山修一、長嶋正浩、継松義彰、菅原広男、神山良男、継松久美男、秋元孝子、市村洋子、若林幸子、平井拓雄

（平井　拓雄）

折井健一さんの追悼山行

丹水会

丹水会産みの親である折井さんが、昨年九月に急逝され、丹水会としては、大きな柱を失ったが、第5回例会は、追悼会ともあって、36名という多数の参加者の下に、11月26日～27日に行われた。

宿舎は昨年の会で、丹沢登山口の大倉で後藤会員の経営する「ロッジ峠」に決めてあり、折井さんはこの日を春から楽しみにしておられたのに、遺影で参加されたことは、かえすがえすも残念なことであった。

定員25名で締め切る予定が、折井さんを偲ぼうという方々のため、10名もオーバーするという、会始って以来の参加者でごったがえし、定刻6時にはほとんど全員が参集され、会場には在りし日の折井さんの山研ハッピ姿、ネパール服の遺影等が飾られ、遺影前にはヨーカン、ドラ焼きがそなえられ、折井さん自らが買求められたという、飛騨銘酒「飛騨娘」がふるまわれた。

進行は学校の後輩であり会のプロモーターである、近藤信行さんの司会で進められ、同じ後輩の鈴木正俊さんや山崎安治さんから、学生時代の想い出や、語られなかったエピソードなどが披露され、また前回の丹水会での記録や韓国・ネパールトレッキングのスライド映写、さらに折井さんが最も得意としておられた「安曇節」の録音テープが蜂谷緑さんから披露されるなどあり、後は夜遅くまで会員同志の想い出などが語られた。

翌27日は、寒さが一段と増した山麓を後に、水無川本谷に総勢27名という大部隊でくり出し、足よりも口の方が達者な沢登りが始った。

初冬の沢は処々氷が張り、沢登りは生まれて始めてと言われる方々のため、要所々々にザイルを用意したが、これを利用される者もなく、F8まで溯行したが、何せあまりの大部隊ゆえ、ここで時間切れ、まき道を出合に下って追悼山行の幕をとじた。

丹水会は、折井さんが生前よく口にされた「地方の会員は地方で親睦を深め、交流してゆくことが大切であり、若い会員も共に語る雰囲気作りをしてゆこう」という信念の下に生まれたものである。私どもは折井さんの託された夢を大切にし、遺志を継いで地道ながら永く続けてゆかねばと、思いを新たにしている。

（参加者）近藤信行、近藤緑、鳥居亮、大森薫雄、三栖寿生、滝沢芳章、網蔵志朗、千葉保之、松田雄一、小林碧、鈴木正俊、平柳一郎、小林由美子、藤江幾太郎、山崎安治、重村清、神戸恵子、川上光久、加藤比呂志、神原忠夫、三宅次郎、榎本進、広羽清、山崎健、中村純二、中村あや、山岸猛男、斎藤かつら、秋山光平、網倉卓爾、大森久雄、小川雅庸、渡辺恒美、山本正基、三好まき子、古谷聖司

（古谷　聖司）

故折井健一氏追悼山行　四句

小林碧郎

炉を囲む灯（ほ）かげに遺影微笑（ほほえ）みて

幻影（おもかげ）の身軽に越えし冬の滝

滝いくつ攀ぢて小春の岩ぬくし

亡き人を偲（しの）び来し谷暮れはやき

（五十八・十一・二十七）

池ノ平温泉の達ちゃんを励ます会

越後支部

冠省　達ちゃんがめっきり老けこんだように見受けられるので、元気づけようではないか、と下記の計画をしたので、山の仲間が旧交を温めるに良い機会にしに、参集下さるよう案内いたします、ときた。

十二月三日午後六時、雪が降り出した妙高高原池ノ平温泉〝長崎ロッジ〟に集合の会員は、十六人であった。

全員着席、式次第に会が進行すると、元気になった顔ぶれは、会員諸君に御存じの達ちゃんこと長崎達男、杉原八百樹、内藤修の面々たちで、〝こりゃ禿を禿増す会だ〟と言い出したのは、名誉支部長の藤島玄である。玄さんは幸か不幸かまだ禿にはならぬが、代って酒が飲めなくなっていた。温泉は低温で入ったまま出られぬし、寝台にねたはいいが、隣の石田のいびきで、W・Cにばかり起きて、午前四時まで眠れなかったし、散々であったようだ。

翌朝六時起床。若い衆はもうスキーの初滑りに出て行った。開けばどんなに酔っても、どんなに遅くなっても必ず帰宅する会員がいるが、そこはうまくできていて、盲導犬ゴンベイがお供して、顔を嘗めたり吠えたりして知らせるそうだ。そうだとすると、JAC本部でも、一匹飼っていたほうがよさそうだがね。

帰途は四輪駆動車で雪道を走り、国分寺の内藤家を表敬訪問して、その豪華なのに驚いてから走りつづけた。

（参加者）藤島玄、長崎達男、五十嵐篤雄、杉原八百樹、石田国夫、横田利八郎、橋本正己、蟹江健一、内藤修、永高賢、饒村義治、渡辺靖男、片桐一夫、池田文夫、根津和育、室賀輝男、

（藤島　玄）

北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月十日（土）午後六時より、札幌、時計台横の北一条西三丁目北洋で開かれ、佐々会長始め三十六名が出席し、盛大に行われた。

先ず佐々会長より挨拶、続いて兼平氏より支部長会議報告、故大塚支部長に黙祷。

忘年会参加者は、遠くは北の歌登町、南は函館、西は岩内からと、はるばる駆けつけて頂き、事務局、集会委員みな感激する。最も北から参加の小栗会員の音頭で乾杯。支部十五周年記念山行知床羅臼岳、大塚支部長遭難神威岳捜索行、ヒマラヤトレッキング、お月見と支部長を偲ぶ会、年次晩餐会と高尾山、金華山や、今西元会長との山行と話題も豊富で、山岳会創立八十周年には、みんなで大いに協力しようと、会場は一段と盛り上った。

二次会は、『鶴』へ、『モンテローザ』へと、サッポロの師走の夜を華やかに彩り、その内七名がY会員宅で、強化合宿ゼミを行い、夜明し朝帰りとなる始末。支部会員の皆様の御厚情に御礼申し上げます。

（出席者）佐々保雄、小栗宏、朝比奈英三、新妻徹、三浦勝幸、山川力、沢田長子、柳田涼子、亀井秀子、井手貢夫、井出雅人、佐々木善民、川越昭夫、大久保五郎、酒巻吟一、井後幸太郎、及川敬一、佐々木喜一、兼平治水、加藤盛一、水科行雄、石崎貞子、横田春雄、直田恒夫、加藤正己、今井三男、赤石喜恵子、沼崎勝洋、青柳かおる、河村皆子、加藤高志、佐伯節子、久保田優一、沢尻利弘、浅利欣吉、平野明

（平野　明）

高尾山懇親山行

年次晩餐会の翌日、地方在住会員を東京近郊の山に案内する企画は昨年に始まった。今年は十二月四日（日）に、昨年に続いて高尾山に登った。

地方在住会員は、東京の会員が現地でお世話になっている方ばかり、北海道の平野明さん、村上山形支部長、西澤熊本支部長ら十二人から参加していただき、総勢五十二名となった。

山田副会長、坂本総務委員長をリーダーとしてケーブル下を出発、名残りの紅葉が僅かに残る落葉の山道をのんびりと登る。稜線に出ると、五合目まで白雪をいただいた富士山が輝き、はるかに新宿の高層ビルが遠く霞んで見えるという、絶好の日和であった。

山頂と城山の鞍部にある水場から、水を担ぎあげ、ホエーブス三台で湯を湧かし始めた頃、早くも本隊が到着し始め、先発隊の世話係が大いにあわてる一幕もあったが、地方会員優先で、お弁当、味噌汁、コーヒー、紅茶、緑茶などを接待した。後日、一部に接待漏れがあったとの話を聞いた。注意していたつもりだが、遠慮深い会員の方に見落しがあったかと世話係一同恐縮している。

昼食後、城山で一次会はとりあえず解散ということになり、当日の上天気の原因？〝快晴の山〟の著者織内元副会長に解散の辞で締めていただき、元の道を戻る組、小仏峠へ下る組にわかれて下った。小仏組と二次会の〝うかい鳥山〟の野鳥料理を楽しむ会は、参加者十九人であった。（三水会・総務委員会・集会委員会・婦人懇談会共催）

参加者（北海道）平野明、柳田涼子、横田春雄、（宮城）岡田幸千生、（秋田）佐藤兼治、佐藤満子、（山形）村上勝太郎、（静岡）青木昇、（東海）三ツ石清、（関西）河野之保、（福岡）吉村健児、（熊本）西澤健一、（東京）山田二郎、織内信彦、市川義輝、遠藤光男、遠藤泰孝、岡田久美子、小倉厚、片岡博、栗原敏起、小林碧、小塩丘平、近藤友好、金田好司、斎藤健治、斎藤直信、進藤波男、重村清、砂田定夫、高田真哉、高橋晋作、高澤光雄、沼倉寛二郎、原謙一、堀川清、丸山直子、山崎健、山崎直人、山崎登、奥徳子

（世話係）坂本正智、石橋正美、板倉健二、中川武、入澤郁夫、市村洋子、武内紀子、神山良雄、関塚貞亨（三水会幹事）岩堀瑞子、荒野康子

（関塚　貞亨）

お知らせ

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

スキー映画の夕べ

日時 二月十五日（水）
午後六時半
場所 山岳会ルーム・集会室
会で所蔵しているスキー映画の秀作をお楽しみいただきます。
共催 総務委員会
フィルム委員会

山スキー技術研究会

山スキーは、いろいろな面で変化の過程にありますが、その基礎になるスキー技術はどう進展しているか、各方面のエキスパートよりお話を伺い、論議する夕べを催します。
「登山靴による山スキー」「兼用靴による山スキー」「スキー靴による山スキー」もテーマの一部です。奮って御出席下さい。
講師 青柳 裕樹氏
北田 啓郎氏
小林 政志氏
高田 光政氏
柳沢 昭夫氏
日時 二月十七日（金）
午後六時半～九時
場所 山岳会ルーム
主催 科学研究委員会

第21回この一本展

日時 二月二十五日（土）
午後一時～六時
場所 山岳会ルーム・図書室
山岳や探検に関する珍しい図書類（手紙類も含む）で、この一本と思われるものを所蔵されている方は、ふるってご出品下さい。ご出品下さる方は、二月十日までに、ルームあてハガキまたは電話でご一報下さい。原稿用紙で八〇〇字以内の解説のご用意もお願いします。
主催 図書委員会

第15回山岳図書を語るタベ

日時 二月二十五日（土）
午後三時
場所 山岳会ルーム・集会室
講師 岩科小一郎氏
山村民俗の会代表
山岳図書一般のほか、ご専門の富士塚や富士講の本についても語っていただきます。
主催 図書委員会

講演会

演題 野鳥の話
講師 中坪礼治氏
（財）日本鳥類保護連盟専務理事、元NHKチーフディレクター
日時 二月二十八日（火）
午後六時半～八時
場所 山岳会ルーム・集会室
主催 自然保護委員会

第12回山岳史懇談会

日時 三月十日（土）
午後三時
場所 山岳会ルーム・集会室
講師 今西錦司氏
西堀栄三郎氏
テーマ 旧三高時代の山登り
主催 図書委員会

講演会

お話 南極物語裏ばなし
講師 村山雅美氏
日時 三月十五日（木）
午後六時半
場所 山岳会ルーム・集会室
会費 三〇〇円（お茶、クッキー）
主催 海外委員会

山岳スキー技術講習会

槙有恒元会長が〝雪の砂漠〟と賞讃した、越後守門岳（一五三七M）周辺で、山岳スキー技術講習会を開催します。山岳スキーの醍醐味を満喫しませんか。
期日 四月六日(金)～八日(日)
コース 栃堀口より入山、道院ヒュッテをベースとして、技術指導および守門岳の登頂を行ないます。
人員 三十名
詳細は次号でお知らせします。
主催 指導委員会

会務報告 11月

理事会
11月7日 午後6時30分
本会ルーム
出席者
佐々会長、山田副会長
神崎、大倉、西村、河村、松家、鈴木、平野、長谷川、村木、皆川、梅野、高遠各理事
小倉、松田監事
飯野、宮下、鳴原、山口、中村各評議員
委任・欠席
田口副会長
田村、赤松、水野、平井、絹川各理事
報告事項
▽定款改正に関する文部省の回答
1 理事の増員 認められない
2 評議員の増員 認める（20→25名）
3 監事の任期 認める（一→二年）
この回答に沿って、再度2・3の申請を出すことにする。
▽年次晩餐会
地方会員のため、ダイヤモンドホテル、ニューオータニに宿泊を手配。翌日の山行は三水会にお願いし、高尾山とする。
永年会員には、五名の方が本年該当し、名誉会員については、11月9日の評議会において推挙することにする。
▽支部長会議
12月3日に開催、80周年と支部とのかかわり方を中心議題とする。
▽中間監査報告
松田監事より、適正に処理されている旨の報告があった。
▽カンチェンジュンガ登山隊報告
現在、装備、食糧の集荷を急いでおり、12月20日前後船出しの予定。1月25日先発隊出発予定。学術隊は、千葉大医学部より二名参加の予定。
▽事務員高橋美津栄の産休
出産のため、規程により産休を与え、その間はアルバイト雇用により処理する。
▽故折井健一氏未亡人より、金五十万円と、故人愛用のピッケル一本を本会に寄贈された。五十万円は特別基金に算入する。
審議事項
▽80周年記念事業準備委員会作成の第一次原案を審議し、了承。
▽海外登山推薦
日大理工学部山稜会「中部カラコルム登山隊」の推薦を了承。
委員会報告
▽山研運営委員会
上高地山研は10月29日閉所。本年利用者四七三名（昨年三七六名）。折井委員長の死去に伴い、新委員長に鳴原啓佑氏が就任。
▽図書委員会
10月22日の図書交換会は、九五一点集まり、売上四七万円。

ルーム日誌

11月

1日（火） 集会委員会
婦人懇談会
2日（水） カンチェ・ミーティング
4日（金） 常務理事会
8日（火） 婦人懇談会セミナー
9日（水） 評議員会
10日（木） 海外委員会
11日（金） 図書委員会
14日（月） 総務委員会
15日（火） 会員懇談会
集会委員会
婦人懇談会
16日（水） 三水会
カンチェ・ミーティング
17日（木） 雪崩講習会
21日（月） 総務委員会
22日（火） 集会委員会
婦人懇談会
25日（金） 科学研究委員会
28日（月） 委員会連絡会
総務委員会
29日（火） 自然保護委員会
婦人懇談会
30日（水） カンチェ・ミーティング
フィルム委員会
今月の来室者432名

会員移動

物故

五一六二 宮西 久吉（56・6・7）
五三三七 村上 明（57・12・6）
八五七五 石坂 一郎（5・16）
九一〇 二木 信次（9・6）
七二七七 島尾智恵子（9・14）
八二六二 禿 博信（10・9）
一五五三 今川 良雄（10・11）
八六四七 中島 孚（10・20）
七四七四 立田 実

改名

五三〇一 杉山 叡（↓正洋）
八五〇三 遠藤 慶太（↓恵大）

改姓

七〇六七 秋山（↓林）利之
七一二三 吉田（↓桜井）広明
七二四九 清水（↓大久保）春美

退会

四九三四 後藤 大策
七七五六 野沢 健吉
八五一八 西鉄山友会
九二〇五 阿部 静江

夫婦会員

八五三五 河村 章人
九四一六 河村 皆子
九四一三 岩下香代子
九四一四 岩下 三男

終身会員

五三八三 千葉 重美

名称変更

五五四九 駒沢大学体育会スキー山岳部

支部変更

九二七〇 平井 祐子（↓宮城）

編集手帖

▼明けましておめでとうございます。本年も会報をよろしくお願いいたします。

▼この年末年始を山ですごされた会員も多いことでしょう。日本の山ばかりか、海外の山にお出かけの方もおられると思います。本号には、山で迎えた正月の三篇を頂戴できました。

▼宮城支部に元日登山の行事があるそうですが、私も郷里で小さな元日登山をして来ました。

▼上越線小出駅前に聳える富士権現（標高差約一一〇米）にも、三十年以上続く元日登山があります。町の山好きが山麓の桜井昭吉さん（越後支部）宅に集まり、雪明りの中をワカンで登っています。

▼生憎、今年は越後三山も、巻機、末丈、守門も、周りの山々は眺められませんでしたが、山上で焚火を囲んで酒を汲み交わし、明けて行く谷あいの町を見下ろす気分は、私にとって、新年に欠かせぬものとなりました。 M

昭和五十九年一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四
サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 皆川完一
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂